三本木湿原（標津町）

田中瑞穂

知床半島の付け根にあたる標津町には、標津川とポー川にはさまれるような形をとって、全面積二七六〇haに及ぶ湿原が構成されているが、川に沿って細長く湾曲していることも原因して、一般には地名によって奥にある川北湿原と河口近くの三本木湿原とに分けて呼ばれている。

川北湿原は低層湿原と中間湿原が過半を占め、高層湿原は中間湿原の中に点在しているような状態で、全体にはキタヨシが優占している。この地域一帯は近年酪農振興事業で草地造成が急進展しているところで、川北湿原の一部もすでに利用の対象となり、今後も継続して草地の拡大が予測される。これに対してポー川下流の三本木湿原は海岸線に並行してのびる砂丘列のすぐ背後にあり、海抜高度も一・四～二・九mと非常に低い。面積はそれほど広くはないが、一カ所にまとまってほぼ円状を呈している。中央部に高層湿原があり、それをやや不規則にとり巻く形で中間湿原に移行するが、上流の川北湿原に向けては狭い幅の低層湿原となり、ヤチハンノキやキタヨシにおおわれた状態でつづいてゆく。

三本木湿原のチャミズゴケ丘

三本木湿原のもっとも著しい特徴は、チャミズゴケ丘が非常に発達していることで一地域をおおうようなひろがりを見せてチャミズゴケの景観としては北海道の湿原のうち、これに勝るところはない。ミズゴケの種類は七種が区別されるにとどまるが圧倒的にチャミズゴケが多く、ブルトの高さは三〇～八〇cmになる。しかし、特異種あるいは不連続分布種に類するものはなく、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、コケモモ、ガンコウラン、エゾイソツツジ、ミツバオウレン　タチマンネンスギ、クロミノウグイスカグラなどがごく普通に見られる。チャミズゴケ生育域につづく中間湿原の性状を示す一帯はイボミズゴケ、ヤチヤナギ、ワタスゲの湿原である。

この標津川や西別川の流域は勾配が非常に緩やかなので、過去においても川は曲折蛇行をくり返し、古川にも富んでいるけれども、それとともに流域には小湿原がかなりの数で点在している。大きい場合では長さ一km近くもなるが、小さいものでは〇・二～〇・三kmほどの小さい湿地のように見えるものもある。

このような小湿原の一つが西別町にあって、そこには十勝の更別に知られるヤチカンバが生育している。わが国で発見された第二の生育地となる。ホロムイスゲやヌマガヤの優占する立地で見られたり、チャミズゴケ丘の連続する立地に見られたりで、その生育環境は必ずしも単純ではない。

（教育大学釧路分校）